

New Zealand-Maori 族の精神保健

—— “臨床民族誌 (clinical ethnography)” の実践 ——

村 上 雅 昭

はじめに

New Zealand (以下 NZ ー人口約447万人, 2013年)における Maori 族 (全人口の約15.4%, 2013年)に特化した精神保健サービス施設を初めて訪れたのは2005年に遡る。筆者は Dr. Ian Falloon (1945年 NZ 生まれ, 2006年没)が主宰する包括的地域精神医療の理想を追求する国際プロジェクト, Optimal Treatment Project (OTP) に1996年より日本支部・みなとネット21を設立して活動に参加していた¹⁾。その後, 2001年に NPO として改組し, 2011年には NPO 設立10周年を迎えるに至っている。前回2004年度の sabbatical year に Dr.Falloon の勧めもあり, 彼の故郷である NZ を訪問する機会を得た。NZ は既に OTP の bio-psycho-social model の考え方を取り入れた地域中心型の精神医療が実践されていた。さらに独自の試みとして先住民族である Maori 族に配慮した独自の model を導入して活動しているのでそれも訪問するように勧められた。

Evidence Based Medicine (EBM) ー「根拠に基づく医療」は1990年代初頭ころからそれまでの医師の“経験”と“勘”に頼った再現性が乏しく, ばらつきの多い医療から最新の医療研究に基づき, 統計学的にも証明され医療として盛んに提唱されるようになっていた。しかし, 1990年代後半にはその行きすぎ

が批判の対象ともなっていた。有効ではない患者の存在や、死に至る病等の適応できない状態も明らかとなった。この反省として、患者との会話を重視しつつ、患者の価値観や希望を尊重した形で医師が全人格的に関わるという Narrative Based Medicine (NBM) — 「患者の語りを重視した医療」(定訳はみられない) の台頭がみられてきた。また、1998年には WHO の健康定義を “Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.” から、dynamic と spiritual を加えて “Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.” とする提起も WHO でされている。実際は欧米各国の先進国の反対にあって現在に至っても実現はしていない。

この先住民族を対象にした精神保健モデルは既存の bio-psycho-social model に Maori 族に特有な伝統的文化を尊重した “narrative” と “spiritual” な視点を加えた先駆的モデルであると推察できた。この実践が印象に残り、2011年度の sabbatical year も同様の Maori 族を対象にした精神保健サービスを訪問した。前回の2004年度に訪問したのは北島、New Plymouth にある Te Rau Pani という NGO のサービスであったが、2011年度に訪問の機会を得たのは南島の Wellington 郊外にある Poirura の Kenepuru 病院の敷地内にある、Te Whare Marie という施設である(参考文献にもある Sir Dr.Mason Durie の紹介を得て訪問することができた)。Globalization が世界を席卷して、地球が一個の巨大な “melting pot” と化し、至る所で creol 化⁽¹⁾ している状況が着実に進行する中で先住民族の文化を尊重した専用の精神保健サービスが提供されていた。この先住民族に特化したサービスが成立した NZ の歴史的背景とそれが示唆するものについて考察する。

1 Maori 族と NZ ——その歴史の概略——

(1) Maori 族の NZ への到着とヨーロッパ人による NZ の発見

Maori 族が自らの民族に特化した精神保健サービスを展開するようになったのは Maori 族とその後に入植した Pakeha (白人) との間の葛藤的な歴史的経緯を抜きには理解できない。Maori 族は Pakeha が入植する遙か以前の大よそ 950-1130年 (Maori 族は文字を持たない民族のため正確な年代は特定されていない) の間に南太平洋 Polynesia・Tahiti・Cook 諸島周辺から移住してきたと考えられ、その遠いルーツはアジア大陸と言われている。彼らが持つ神話では彼らの出身は南太平洋の伝説上の“Hawaiki”と呼ばれる所で、大きな 7 艘のカヌーに分乗して“Aoteaora”(NZ の Maori 語の名前—「白い雲がたなびく島」の意味) に辿り着いたとされる。

一方、ヨーロッパ人で初めて NZ を発見したのは1642年12月にオランダ人の Abel Tasman であるとされているが Maori 族との争いの中で上陸して十分な調査を実施できずに帰国している。その後、100年以上経って、英国人 James Cook が1769-1770年にかけて訪れ、Maori 族との軋轢を起こしつつも南北両島の測量や周辺の調査を実施して New Zealand と命名している。New Zealand の名前は最初の発見者がオランダ人であったため、オランダにある Zeeland 州からとり、Nova Zeeland (ラテン語) と命名されたのが起源とされている。Cook 船長は Maori 族の部族間抗争が激しく、常に戦争状態にあると記載している。彼等は鉄器を持たなかったが、石器を使用して農耕や森林の伐採、カヌーの製作、刺青をする事が出来た。好戦的な性向は英国がそれまでは入植した他の植民地の先住民とは異なり、容易に屈服する事はなかった。神、長老、戦士、呪術家、要塞を持ち、これらの存在も今まで入植した植民地の先住民とは様相が異なっていると記している。その後の1790年代にはヨーロッパ

諸国の捕鯨遠征が始まり、Australia を経由するなどして、商人や捕鯨関係者、囚人の脱走者が主に海岸線に移住するようになった。1837年に London で植民会社が設立されて2年後には組織的な移住も始まり、英国人の移民の数は急増する。Maori 族と本格的な入植が始まったヨーロッパ系の住民との土地を巡る争いが絶えなくなる。

移住してきた Pakeha は地元の Maori 族の部族との交易も盛んにするようになり、現地の麻や芋・豚・果実等の食料の代わりに Maori 族は釘などの鉄製品を購入して今までの石器に替わりノミや魚釣りのための針を製作するようになる。Cook 船長も記したようにヨーロッパ人が入植する以前からも、Maori 族は土地の所有権を巡って部族間で激しい戦闘を繰り返していた。ヨーロッパ人との交易が盛んになるにつれ、北島の有力部族の酋長である Hongi Tika (1772-1828) はマスケット銃を手に入れる。彼は Maori 族の中でも入植した英国人宣教師を保護する役割も果たしていたため（最初のキリスト教の宣教師が来島したのは1814年とされる）、英国に渡り、George IV世に面会することも果たしている。その際に受け取った多くの贈答品を帰途に売り払ってさらに大量のマスケット銃の購入に充てている。この大量のマスケット銃の使用により銃器を持たなかった Maori 族間の部族抗争の様相を激変させることになる。Hongi Tika が率いた1821-1825年に起こった部族間抗争では2,000人が死亡したとされ、過去25年間に起こった散発的な部族間抗争の死者を上回ったとされる（マスケット戦争：1807-1842年）。因みに彼は Cambridge University の言語学者 Samuel Lee にも会い、最初の Maori - English 辞書を作成している。

Maori 族の人口は1830年代にかけてもマスケット銃を使用した部族間抗争の死者とヨーロッパ人が持ち込んだ麻疹・インフルエンザ・コレラ等の感染症に対して免疫が無かったお陰で激減してしまう。その数は Cook 船長が到着した1769年の200,000人から1858年には56,000人に減少したと推定されている。また Maori 族は捕鯨関係者、アザラシ猟師、商人、Australia からの受刑者の流入

による無法行為に悩まされるようになっていた。土地を巡る部族間の争いや感染症による人口の減少も手伝って、Maori 族の内部にも結果的に英国に保護を求める機運が徐々に高まるようになった。

(2) Waitangi 条約の締結

Maori 族のこのような背景に加えて、英国にとっても NZ の領有権を巡り特に France が NZ を植民地化する意図を明らかにしたこと、既に入植していた 2,000 人前後の入植者の保護も必要となったので Maori 族との何らかの条約を締結する必要性に迫られるようになっていく。その結果、その後初代 NZ 総督となる英国の W. Hobson が中心となり、Maori 族の部族長と 1840 年 2 月 6 日に Waitangi 条約を結び、英国の直轄植民地とするとした。条約には英語版と Maori 語版が存在する。

英語版の第 1 条項では英国女王が NZ の主権を持つと銘記されている。第 2 条項では Maori 族族長の土地、森林、漁業権所有の保障を全面的に認めている。第 3 条項は Maori 族の英国国民と同等の権利を認めている。名目は英国の配下に入ることで部族間の混乱に乗じた無法な土地の収奪を防ぎ、Maori 族の森林の所有権、漁業権と英国国民としての権利を保障し、代わりに既に入植していた 2,000 人の開拓者の安全も保障することにあつた。条約の主意は簡潔に 3P (*Protection* = 保護, *Partnership* = 協力, *Participation* = 参加) で表現される事が多い。部族間の無意味な争いを中止し、英国の保護を受けつつ白人と友好的に共存し共に社会参加することを目的としていた。

Maori 語版では主権や土地の所有権 (*kawanatanga*, *rangatiratanga*, *mana*, *taonga* 等) を巡る当時のヨーロッパ諸国との文化的な考えの相違から訳語の解釈も異なり、そもそも条約締結当初から齟齬が生じていた。例えば所有権を巡る論議も英語では身体的・知的所有物を連想させるが *taonga* は“宝物”であり“貴重な物”で英語の法的所有の概念よりも広く、無形の言語や文

化にも及ぶとされる。土地に関しても Maori 族は土地の守護者と自認しており、一定の目的のために一定期間貸し出す許可をするという考えで、売る概念は無かった。当初は入植者たちに土地を明け渡していた Maori 族も Pakeha の入植を渋るようになり後々の入植者たちとの紛争のタネとなった。全島で500以上の部族長が条約に調印したものの、幾つかの有力な部族長は調印を拒否している。多数の部族が調印したものの、当初から条約は約束どおり履行されず、条約締結にも関わらず両者の間で NZ 戦争（土地戦争、Maori 戦争とも呼ばれる）が1845年に勃発する。Maori 族の立場から見れば条約の内容が反故にされることとなり、1845年と1872年の2度に渡って大規模な戦闘が Pakeha との間で起きている。

この間、政府は1863年に Suppression of Rebellion Act（反乱鎮圧法）を制定して Maori 族の権利を一時的に停止する。土地を守るために戦った Maori 族を反乱者として決めつけ、裁判なしに無期限に拘束する事を可能にした。また同年に NZ Settlement Act（ニュージーランド入植法）も制定して戦争に加担した Maori 族の土地を没収した。その後も Maori 族はヨーロッパ人に土地を収奪され続けたため正式に和平交渉が成立する1881年まで条約締結後約50年の長きにわたり戦争は続くことになる。正式な戦いはここで終結し、表面上の対等は漸く確保された。

2 Maori 族の文化の復興

伝統的価値観を奪われ、同化政策が進められる中、一時期、Maori 族は絶滅するだろうとも危惧された。第二次大戦後には田舎から都市への大幅な人口流入も起こった。しかし予測に反して一定の人口は保ち続けることが出来た。復権への道は1970年代の大きな政治的うねりの中で起こり、失われた土地への賠償問題が取り上げられるようになった。1975年には Waitangi Treaty Act

(Waitangi 条約法) が制定され、Waitangi 特別委員会 (Waitangi Tribunal—特別法廷) が設置された。これは、「Waitangi 条約の原則に反する諸事項を認めた場合に、条約の適応に関して異議が唱えられたことに関連して適切な勧告を可能とするため」であった。しかし、これも当時は文言だけのものであって、1980年代になり初めて土地汚染などの具体的な問題で取り上げられるようになった。また、1840年の条約自体も完全な法律として認められる機運が高まった。1987年には Maori 語が公用語として認められ Maori 語専用の放送局も認められた。1989年には時の首相が「Waitangi 条約は我々の国の最大の統一の象徴となりうる」と宣言したことで特別委員会は大きな力を持つようになる。例えば、同年の The Children, Young Persons and Their Families Act ではソーシャルワーカーが Maori 族の伝統的価値や拡大家族 (whanau-Maori 族は子供を集団的な責任で育てる習慣がある) の事も考慮して働くように記されている。その後、徐々に法律的にも Maori 族の文化的価値を考慮するようになっていく流れが出来あがる (The Resource Management Act 1991)。1992年に制定された Mental Health Act (第5, 65項) では、「この法律の下で法廷を開くものは個人の文化的、民族的 identity, 言語, 宗教や民族的心情を尊重しなければならず, whanau (拡大家族), hapu (一族, 仲間) iwi (部族) を含めた家族の絆も重要性も認識しなければならない」と明記している。このようにして Waitangi 条約の締結から約150年の紆余曲折を経て1980年代になり“同化”から“統合”へと二文化主義を採用したといえる。現在はアジア系住民の流入で多文化主義ともいえる状況が生まれつつある。

3 近代の Maori 族の心身の健康状態

このように二分化主義を採用したとはいえ、Maori 族と非 Maori 族との健康状態には大きな差があると近年指摘されている。1999年の統計によれば Maori

族の死亡率は10万対764で、これは非 Maori 族の10万対413の実に85%もの高値である²⁾。心臓－血管系の死亡率が極めて高いことが指摘されている。1996年の疾病の負荷とともに生きる DALYs（障害調整余命年数：健康寿命の一種）は Maori 族のそれは非常に低いものであった。身体面の詳細はこれ以上触れないが、癌の死亡率でも大きな開きが存在する³⁾。

身体疾患のみならず、精神保健についても大きな差が見られる。1975年より精神障害が増加し、その要因は多様で複雑だと言われるが、その中でも大きな問題は前述したような伝統的文化からの乖離が大きな原因とされている。1998年の Ministry of Health の Maori 族に関する精神保健の報告では、「Maori 族の文化は危機的状況にある」と警鐘を鳴らしている。Maori 族は白人系の住民よりも精神科施設への入院が25%多く、再入院率も65%も多い⁴⁾。

1993年では入院した白人系の22%が統合失調症であったのに対して、Maori 族は38%が統合失調症と高率であり、その状況は現在も大差ない。ここで、指摘される問題は、統合失調症の疾病率の極端な差は実は非 Maori 族の医者が、実はストレスや薬物から惹起される Makatu, mate Maori という精神運動興奮状態を精神病と間違え入院させているのではないかという疑問である。これらは、統合失調症のような長い経過をとらず、適切な文化的・“霊的”な介入があれば速やかに軽快するとされている。精神病のみならずアルコールを代表とする薬物疾患に関連した入院でも Maori 族と白人の差は歴然としている。自殺率も非 Maori 族に比べると高率である⁴⁾。

こうした非白人－Maori 族との間の精神医療の利用度の差はこの間の土地の取奪、その結果としての経済的貧困等が大きく関係しているとの反省がある。Maori 族としての identity そのものが健康状態に重要な影響を与えているからだとの指摘もされている。それは、Maori 族であるという意識、拡大家族に繋がっていること、祖先の知識があること、Maori 語が話せること、他の部族との交流があることなどが重要な要素として挙げられている。このような白人系

と Maori 族の心身の健康状態の厳然たる差を前にして、Waitangi 条約こそが国家の原点であり、今後の多文化社会の象徴とするからにはその実際的な履行を始めとした Maori 族と取り巻く社会体制の整備が必要となった。伝統的な Maori 族の健康感を取り入れたサービスが不可欠のものとなってきたのである。この動きに拍車をかけたのが Maori 族の人口増加である。絶滅するのではという予測に反して、今や学齢期の子どもの 1 / 4 が Maori 族で、2051年には 1 / 3 を占めるまでになるという。NZ の中で、Maori 族は重要な位置を占めるのであり、今からこうした多文化社会に向けての準備が始まっているのである。こうした流れの中で、identity の重要性に関しては特に精神保健分野で働く Maori 族が目し、積極的に導入しはじめた。

4 Kaupapa Maori Assessment^{5) 6)} — Maori 族の文化面からみた評価

Maori 族の精神保健施設で実施している対象となる当事者の Maori 族の文化面からみた評価である Kaupapa Maori Assessment を理解するには Maori 族の文化の概要を理解する必要がある。

(1) 神話・世界観

Korero Tawhito (古い伝承, 口伝) は彼らの神話上の故郷 Hawaiki に源を発し, Maori 族の社会に大きな影響を与えている。伝統社会における法律の役割も果たし, 或る一連の事象を説明するのにも援用され, 適切な行動の規範となるものであった。Maori 族の社会の概念, 価値を反映するものである, それを信じる人々の生き方であり, 理想であり, 規範であった。ヨーロッパ人が入植するまで広く信じられていた。それは, 代々引き継がれ, kawai tipuna (“擬人化された崇拜されている祖先” — Maui が一番有名であるが他にもその時代の太古の部族の英雄たちがいる) の創造 antics に満ちた営為と人類の英雄的

行為 exploits で始まる。生活と環境のあらゆる場面に影響を及ぼすと考えられている。

世界観は開放的・動的とも言え、“霊的な領域 (Ranginui, Papatuanuku)” “現実世界 (Mana - Tapu - Noa)” “死者の領域 (Hinenuitepo)” の3層構造から成り、お互いが相互に関係する。従って祖先は傍らで存在していると信じている。亡くなった者も現実を生き、またその子孫の中でも連綿として生き続ける。それは、彼らの葬送、諺、祈りの言葉から明らかである。霊的な領域と肉体的な領域の区別はない。彼等にとって、過去は後方に存在するものではなく、前方に存在するもので、そこに規範や目的を見出す。宇宙の霊的な概念が Maori 族社会の価値と禁止事項を創っていた。神話と体系だった儀式が全ての人間の活動と関係を司っていたといえる。

伝統的な Maori 族の社会に通底するのは Mana と Tapu (Noa) の概念である。これらは、kawai tipuna (尊敬する祖先) から受け継いでいるものであるとされ、mana は直接 tipuna (祖先) から受け継ぐだけではなく、個人的に人生を通じても獲得できる“霊的な力・威信”であるとされ、個人ばかりでなく、一族の集合的な mana が特に重視される。Tapu は taboo の語源ともされ、“神聖で犯さざるもの・超自然的存在”として社会の中で環境面であれ、人間的な対人関係の要素であれ“保護的”な装置として機能する。例えば環境であれば以前事故が多発した場所などは tapu とすることで、人間の干渉を遠ざけ立ち入り禁止となり安全区域を結果として作り、地域の事故を防ぐ役目を果たす。人間的な要素であれば、例えば産後の妊婦は tapu とされ他人との接触を一定の期間を忌避することになり感染症に罹患する危険性のある程度防ぐ事になる。侵犯された場合は危険を招くとされる。お互いの tapu を尊重することが重要とされた。Noa は逆に制限がない通常の状態を指す。(柳田民俗学の“ハレとケ”の概念に通じる考え方が存在する。)

(2) 社会構造・家族・土地

社会構造は Whakapapa と呼ばれる血統、同族の組織が中心となって成立し、これが個人と同族を規定し、その関係も支配する。Whanau が Maori 族の基本的な単位で、生まれ育った拡大家族・家系である。Whanau の集合体が Hapu と言われる単位で日常的な社会・経済的判断はこのレベルで決断が下される。Hapu の集合体は Iwi と呼ばれ Maori 族の中で最大の独立した政治・経済の単位であり、領地の境界でも認知され社会的に文化的にも大きな意味を持つ。そして、一番大きな括りが Waka であり、同族のことであり、何代も遡ると最後は NZ に辿り着いた7艘の Waka に辿り着くとされる。

土地は Maori 族にとって単なる住む場所以上の意味がある。土地を収奪されることは単に生計が絶たれ収入が減ることばかりではなく、土地は彼らにとって祖先と精神的に繋がる重要な意味を持つ場であり、特に先祖伝来の土地に立つ集会所 (marae) は hapu や iwi が集い、種々の話し合いを持ち、お互いの結束を確認する場所であり、土地の喪失は結果的には spiritual well being (霊的に良い状態) を損ない精神的な大きな痛手を受けるとことを意味していた。土地や自然に対する考え方は日本の精霊の概念を連想させる。

(3) 社会階層

Rangatira, tutua, taurekareka の3つの社会階層から成り立っている。Rangarita 階層のは長子相続制の社会の Maori 族では hapu, iwi を遡って長男にあたる人間が一番上に立つ。Tutua の階層は人数的に一番多く、それぞれ技術を持っていた集団で Rangarita ほど高級ではないにしろ、自らの出自を名乗る事は出来た。一番部族の生産性に関わっていた。Taurekareka は戦争によって敗北した奴隷の階層である。勝利した hapu, iwi の中で単純作業を使用人としてこなしていた。この3つの階層とは別個に tohunga が存在した。彼等は、

幼い頃より発揮した特殊な才能に依り、宗教的儀式を取り仕切ったり、必要であればヒーラーとしての役割も果たした。家・カヌーの建築という特別な技術を持った独自の集団であり、天体運行、天候の自然現象にも詳しく、部族の歴史にも精通していた。謂わば Maori 族の社会では科学者、哲学者、宗教家の役割を兼ねていた。

(4) 健康感

このような世界観の中で Maori 族は西洋人とは違った特有の健康意識を持っている。Maori 族では「健康は自己実現や、自己完結感 (self efficiency) で感得されるものではなく、個人は自身の健康にももちろん責任があるものの、より集合的な責任より形成されていると一義的に認められている。また、個人の健康はより大きなシステムの一部と考えられており、霊的なものと現実的なもの、考えと気持ち、身体と精神は西洋的考えよりも分けがたい」とされている。C. Jung が唱えた集合的無意識に近いものがある。彼らにとって西洋的医学体系の中で決定的に欠けていたのが taha wairua (霊的な側面) である。以下に代表的な Maori 族の健康感である Mason Durie が提唱した Te Whare Tapa Wha (健康の4つの側面—1994年) と Rose Pere が提唱した Te Wheke (タコの8本の触手—1984年)、今回訪問した Te Whare Marie で使用していた Te Pounamu を具体的症例を提示しながら紹介する (個人が特定されないように改変を加えた)。

1) Te Whare Tapa Wha (健康の4つの側面)

健康の4つの側面とは、霊的健康 (Te Taha Wairua)、精神的健康 (Te Taha Hinegaro)、身体的健康 (Te Taha Tinana)、家族の健康 (Te Taha Whanau) である (それぞれのアセスメントシートが存在する)。“精神障害”と診断された当事者と家族にこの Te Whare Tapa Wha に基づいて現在の状

態が評価される。“精神障害”と診断された“患者”と家族にこの whare tapa wha に基づいて精神保健サービスに組み込まれているメンバーの一人である Maori 族の長老 (kaumatua) がその状態の意味するところを“読み解く”。

表 健康の4つの側面

	霊的健康	精神的健康	身体的健康	家族の健康
焦点	霊的	精神	身体	拡大家族
鍵概念	信頼とより幅広い理解が可能となる潜在能力	理解しあい, 考え, 感じることの出来る潜在能力	身体的成長と発展の潜在能力	お互い繋がりあり, 助け合い分かち合う潜在能力
テーマ	健康は見えない, 語ることの出来ないエネルギーに関連し, 身体的症状も霊的な不調の有るなしをみる	精神と身体は不可分であり, 気持ちを通じてのやりとりは言葉を通してよりも重要である	自己実現には身体的健康は不可欠であり, 健康は精神的, 霊的, 家族の健康と不可分	個人はより大きな社会的システムの一部にすぎず, 祖先, 過去と現在, 未来を繋げるものである

この中でも人間と自然の連関を実感できる霊的な健康こそが一番重要とされている。自然環境は identity と融合したものであり, 伝統的な土地や領土に対する結びつきがないことほど不健康とされる。

精神的な健康は個人の健康はもちろんの事, whanau に属する全員の感情的, 心理的 well being を意味する。考えることと (言葉で喋られたこと) と感じることの重要性が指摘されている。一方, 西欧文化ではこの2つは峻別され, 喋られた言葉が往々にして重要視されるが, Maori 族にとっては同列であるとされている。喋られた言葉よりも, 顔の表情や目の些細な動きが重要な意味を持つ。また, 彼らのお互いを理解の仕方は, 細かに分析的に思考するよりも大きなシステムの中での類似性を見つけようとする事である。不健康な状態も, 原因はその個人内部にその理由を求めるよりも, 外界との相互性からその原因は追究され外部環境との不調和にその原因が求められる。

身体的健康もヨーロッパの観念とは若干違っている。前述した神聖 (tapu)

な部分、身体で言えば特に頭部と神聖でないそれ以外のところを別々に分けて考えている。寝る、飲む、食べる、排泄するなどの諸機能も様々な意味が込められている。例えば、共に食事をすることはお互いの貴賤や関係の疎遠さの距離をなくす儀式として捉えられている。

家族の健康の中で、例えば子供の養育は拡大家族の義務としても捉えられている。両親が養育できない時や幼児虐待などが起こった時などは遠縁がみるのは当たり前で、両親の元から引き離して育てたりする。この点、拡大家族の中での両親の養育権はヨーロッパに比べると極めて低く考えられている。また、前述したように identity に関して言えば、自己完結感や自己実現はさほど健康に対して重要な意味を持つものではなく、お互い独立するよりも助け合うのが良いとされる。これは、ヨーロッパ的発想と大いに異なる。

2) Te Wheke (タコの8本の触手)

これは家族の健康概念を表すものである。タコの頭部は whanau を表現し、眼は waiora (個人と集団の総合的な well being) であり、触手の夫々は健康の特定の次元を表現する。その次元はお互いに織り合わされて触手のお互いの緊密さを表現している。

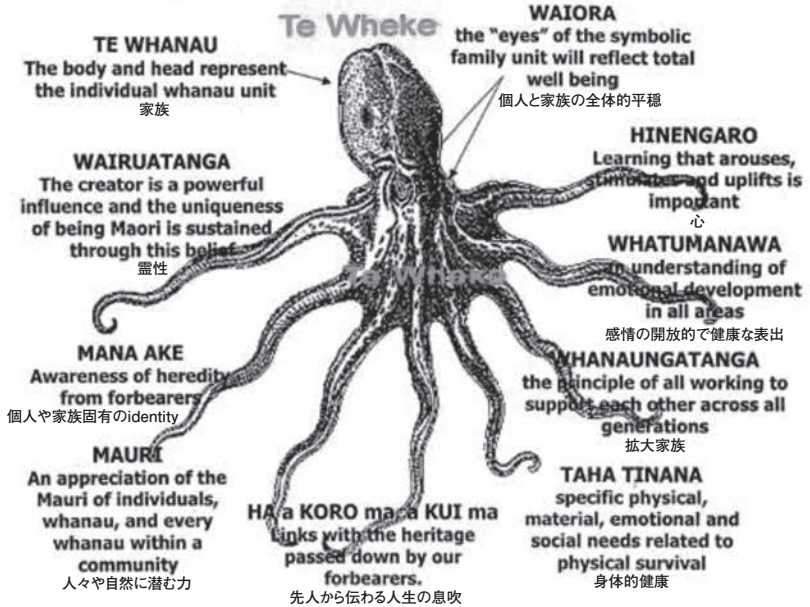


図 タコの8本の触手

3) Te Pounamu

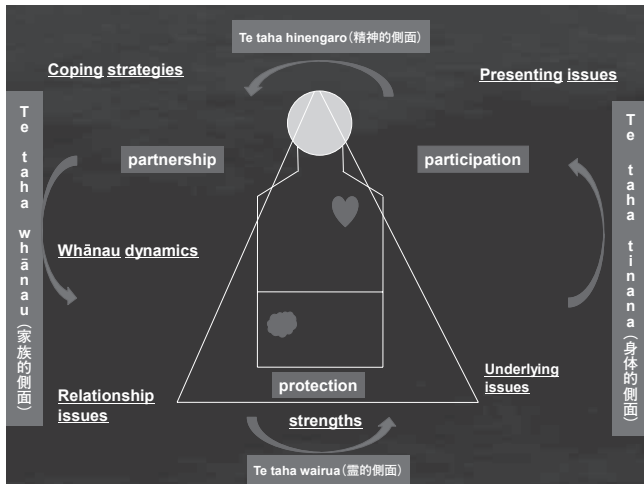


図 Te Pounamu

図中の囲み, partnership, participation, protection は前述した Waitangi 条約の基本理念でもある。



図 症例：16歳女性

このように, Maori 族の健康感は大カルト的二分法に比べて明らかに異なり, より全体的 (holistic) であり, 健康は大きなシステムの中に統合されていると考えている。植民地化されて150年が経ちながら Maori 族は NZ 戦争という激しい抵抗を経た事が結果的には西洋近代国家の中で民族としての独自の文化を失うことなく民族の identity を保ち続けたともいえる。

5 近代精神医学の流れの中で

精神医学の中には「文化精神医学」という1つの分野があり, Kirmayer⁷⁾

は3つにまとめている。①精神障害と伝統的癒しの比較文化的研究、②先住民・移民・難民を含む多様な人々の精神保健のニーズに応えようとする研究、③精神医学自体を文化的歴史の産物として考える民族誌的 (ethnographic) な研究時期に捉えた。アメリカ精神医学会が1952年に DSM 第1版を発表して以来 (2013年6月:第5版)、精神疾患は徹底的に操作的に分類されることになった。こうした疾患の操作的臨床分類に基づいた研究成果が発表され、これが“科学的論拠”として提出され、これに基づいて最新の治療指針が提出され、それがまた新たな“科学的論拠”としていつの間にか絶対的な地位を確保していくというのが近年の精神医療の構図である。国際的な比較研究には大きな成果を挙げたことは否定しないが、現場の臨床医はこうした、疫学的・統計的事実からなる“科学的論拠”に基づいて目の前の当事者を“治療”していかざるをえなくなってきたていており、臨床場面での経験的な知識や発見的知識が軽視される事態になってきている。Kleiman が指摘するように、そこには医療職が主導して、徹底的な統計的手法を駆使して分類された「外側」から再構成された“疾患”のみが一人歩きして、患者や家族が「内側」から経験するものとしての“病”の視点は消失してしまっている^{8) 9)}。こうした流れを反省し、補完するものとして近年、臨床民族誌 (物語のアプローチ) の重要性が指摘されるに至っている^{10) 11) 12) 13) 14) 15) 16)}。それは、“文化人類学と心理学を用いた精神疾患に対するアプローチの方法であり、その個人の全体の生活史をその個人が属する文化と地域の中のコンテキストで読み解く”立場であるといえる。

Te Rau Pani 及び Te Whare Mare ではこのよう“精神障害”と診断された“患者”の「病」の体験を西洋医学のみの観点から“分類・診断・治療”するだけでなく、Maori 族の歴史的・文化的な文脈の中で“患者”のみならず、家族もどのように理解したらよいのか“患者”と家族にこの Te Whare Tapa Wha や Te Pounamu に基づいて現在の状態をそれぞれの組織に属するメンバーの一人である Maori 族の長老 (kaumatua) が“読み解く”作業が展開さ

れていたのである。

Maori 族固有の歴史に配慮し、その流れの中で個人に焦点をあてながら精神障害を理解しようとする試みは、Maori 族が激しい闘争の末、Waitangi 条約を対等な立場で勝ち取ったこそその結果であろう。Waitangi 条約が締結してから150年経た現在も固有の文化を失わずに来たのは戦いの結果と言えなくもない。最初に触れたように、evidence 一辺倒ではなく個人の価値観を重視した narrative を spiritual な側面も含めて holistic に診て行く立場は一見“近代・現代”に逆行するかにも見えるが、今後の精神医療の方向性を示唆する実践である。

おわりに

NZ 滞在中に Marae（集会場）で開催された地域に居住する諸部族の精神保健に関する集会に参加するという貴重な体験をした。前日に呼び出しがあり、どのような目的で滞在しているのか数人の長老（kaumatua）に事前の面接を受けることを指示された。幸いにも許可が下りた。当日は各地から部族がバスを仕立てて、三々五々集まっていた。Marae への入場を待っていたのである。すると Marae の前で長老の女性が朗々と唄を唄い出した。一世を風靡した opera 歌手の Kiri Te Kanawa（Maori 族の血を引く）を思わず連想した。すると誰の指示を受けるでもなく、一列に並んだ（おそらく部族単位であったと推察される）その先頭にいた女性が後に続く部族を代表して唄を唄い返した。後で聞くとところによると歓迎の唄であり、返礼の唄であった。それが終わると全員が一列に並んで厳かに Marae に向かって歩き出した。Marae は土足厳禁なので靴を脱ぎ、裸足になって入場した。入場すると薄暗い室内には主催者が建物壁に沿って並んでいた。それぞれに hongi⁽²⁾ を行いながら自分の与えられた場所に座り powhiri⁽³⁾ が始まった。全員が着席すると主催者の司会者が

それぞれの部族の代表に自己紹介するように促した。部族代表はそれぞれが名前を名乗ると自らの出身地、出身部族と自分の母なる山は何処であるか、母なる川は何処であるかを述べた後に唄を唄った。その部族に伝来する唄であろう。最後に haka⁽⁴⁾ を披露して次の部族に繋ぐといった具合であった。



Marae



歓迎の唄



Marae への入場

私自身、都会生活者の3代目で“故郷”の思い出といえば小学2年生の遙か

昔に母方の祖父母の出身地（現愛知県岡崎市）を訪れた記憶があるのみで、既に訪問すべき“故郷”は消失している。完全な都会生活者であり、名前を聞けばどの部族出身で、その歴史的な出自が連綿と分かるという Maori 族ほどの強固な roots は持ち合わせてはいない deracine ともいえる。しかし、遙か昔に訪れた岡崎市郊外の田園風景は原風景として焼きついており、祖母が生前に語った出自の聞き語りのテープも大切に保管してある。遙か彼方ではあるがこの確かな記憶は identity の礎の一部になっているのはたしかで、以前に流行った Alex Haley の小説“Roots”の Kunta Kinte の末裔が抱いたような、自分が一体何処から来たのかという不安感は味わうことなくすんでいる。こうした原風景の体験と共に普段はともに生活していなくとも、日本で言えば法事のような機会に一族郎党が会して集い、見えない世代との縦の繋がりを感じ、また拡大家族のように何らかの形でこの世に共に生きているという横のつながりを感じ得るのも心の平安には重要であると感じた。

人間が“疎外”された DSM 一辺倒の精神医療のみならず、今後はこうしたより spiritual とまでは言わないまでも、個人史に焦点を当てた精神医療も必要であろうと感じている。これは、元はといえば Maori 族が Asia を起源として、日本もまた animism を基礎とする国だから親近感があるからということのみならず、やはり個人にとっては遍く広い意味での“故郷・自然”と繋がった“物語”が必要なかもしれない。

外国語の固有名詞及び日本に既に馴染んでいる外来語は英語の表記にした。

注

- (1) カリブ海、南アメリカ一帯の植民地で生まれた本国人とは区別される白人をさした
が言語的には2つの言語が接触して生まれた形態より発展し文化などの様々な人間社会的な要素の混交現象。(参照：社会学辞典，昭和63年，弘文堂)
- (2) Maori 族の挨拶で鼻をこすり合わせる。

- (3) Maori 族の歓迎の儀式。
- (4) 舞い。戦いの前に身体を叩いたり、舌を大きく出したりして足を力強く踏み、相手を威嚇する意味があった。英語では war cry。Rugby の New Zealand 代表 All Blacks が試合前に披露する事で日本にも馴染みがある。

引用文献

- 1) 村上雅昭：“Optimal Treatment Project”の日本での実践について—精神分裂病の地域における新しい治療・援助のアプローチ—, 明治学院大学論叢 第609号『社会学・社会福祉学研究』102: 1-26, 1998
- 2) New Zealand mortality statistics, 1950-2010
- 3) Unequal Impact: Māori and Non-Māori Cancer Statistics, 1996-2001, Ministry of Health New Zealand
<http://www.health.govt.nz/publication/unequal-impact-maori-and-non-maori-cancer-statistics,1996-2001>
- 4) Geoff Bridgeman and Lorna Dyal : *Report on Maori Mental Health for the New Zealand Ministry of Health*, 1998
- 5) Mera Penehira, Fiona Cram & Kataraina Pipi : *Kaupapa Maori Governance-Literature Review & Key Informant Interviews*, Katao Ltd., 2003
- 6) Anaru Eketone: Theoretical underpinnings of Kaupapa Maori directed practice
<http://www.review.mai.ac.nz/index.php/MR/article/viewFile/98/106>
- 7) Kirmayer, L.: Research in Cultural Psychiatry; A North American Perspective 額賀淑郎 (訳): 文化精神医学における調査研究—北アメリカの視点から, 『こころと文化』1 (4): 285-304, 1997
- 8) 江口重幸: ナラティブ・ベイスト・メディスン (NBM), 『精神医学研究所業績集』第41, 財団法人精神医学研究所 *The Bulletin of the Institute of Clinical Psychiatry Tokyo*, No.41: 36-39, 2004
- 9) Kleiman, A.: *The Illness Narratives: Suffering, Healing and the Human Condition*, Basic Books, New York, 1988 江口重幸, 五木田紳, 上野豪志 (訳) 『病の語り: 慢性の病をめぐる臨床人類学』誠心書房, 東京, 1996
- 10) 野村直樹: 語りから何が読み取れるか—精神病院のフィールド・ノートから—, 『文化とこころ』Vol.2-No.3: 145-162, 1998
- 11) 松沢和正: 精神科医療における臨床民族誌的接近の意味, 『千葉大学 社会文化科学研究』第2号: 111-138, 1998

- 12) 江口重幸:精神科臨床におけるナラティブ・アプローチ,『精神科』Vol.16 No.4 : 326-331, 2010
- 13) 江口重幸:そもそも臨床民族誌とは—臨床民族誌:医療をめぐるエスノグラフィー,『文化とところ』Vol.2 No.3 : 3-4, 1998
- 14) 江口重幸:精神医学はどのようにして人類学に出会うのか,『精神医学研究所業績集』第44,財団法人精神医学研究所 The Bulletin of the Institute of Clinical Psychiatry Tokyo, No.44 : 21-25, 2007
- 15) 江口重幸:病の自然史経過とその物語構成—精神科臨床における民族誌的アプローチ—,『精神医学研究所業績集』第40 : 17-37, 2003
- 16) 江口重幸:なぜ臨床場面に医療人類学的思考が必要なのか,『精神医学研究所業績集』第40 : 44-49, 2003

参考文献

- Keith Sinclair : The Maoris in New Zealand, *HistoryToday*, Vol.30 Issue 7, 1980
- Mason Durie: *Mauri Ora*, Oxford University Press, 1994
- Cultural Assessment Guidelines for the Mental Health Section of the Ministry of Health in 1995
- Standardising Rates of Disease*, Ministry of Health New Zealand, 1998
- 酒井明夫, 下地明友, 宮西照夫, 江口重幸編『文化精神医学序説 病・物語・民族誌』金剛出版, 2001
- Mason Durie: *Whaiora*, Oxford University Press, 2001
- He Hinatore ki te Ao Maori: *A glimpse into the Maori world*: Ministry of Justice, 2001
- 小森康永『ナラティブ実践再訪』金剛出版, 2008
- John White : *The Ancient History of the Maori, his Mythology and Tradition*, Vol1-5, Cambridge University Press, 2011
- Maori Mental Health Needs Profile — a review of the evidence
[http://www.moh.govt.nz/notebook/nbbooks.nsf/0/03D02AFFEF3812A4CC2574FD0004C309/\\$file/Maori%20Mental%20Health%20Need%20Profile%20full.pdf](http://www.moh.govt.nz/notebook/nbbooks.nsf/0/03D02AFFEF3812A4CC2574FD0004C309/$file/Maori%20Mental%20Health%20Need%20Profile%20full.pdf)